

恭仁宮

長岡京

と

その実態に迫る！

報告1

「恭仁宮中心部の構造

－朝堂院区画を中心として－

京都府教育委員会 中居 和志 副主査

報告2

「長岡京遷都の実態

－周到に計画された遷都－

京都府埋蔵文化財調査研究センター 小池 寛 課長

令和3年3月6日(土)

ウイングス京都 2F イベントホール

主催

京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

くにきゅう 恭仁宮中心部の構造

—朝堂院区画を中心として—

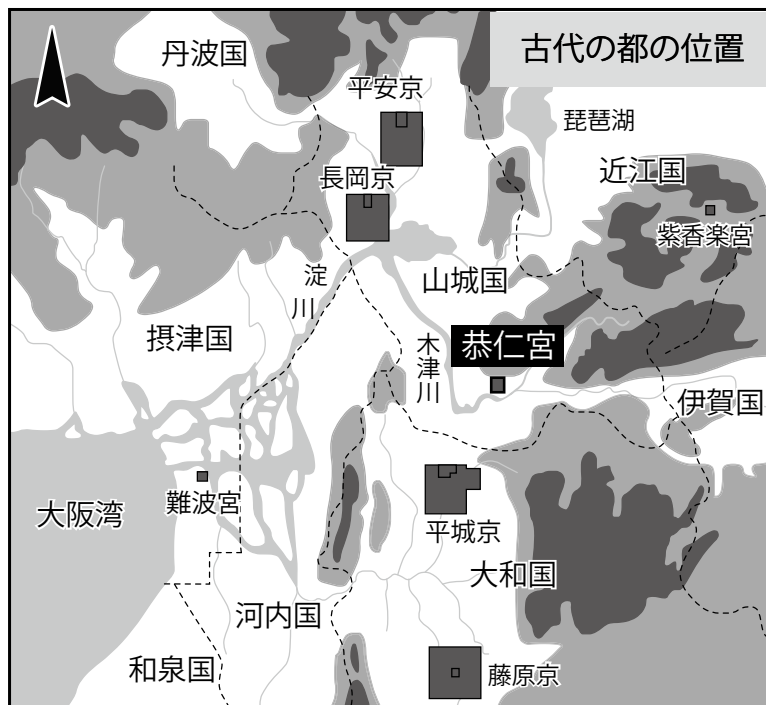
京都府教育庁指導部文化財保護課

副主査 中居 和志

1 はじめに

恭仁宮は、今から1200年以上前の天平12(740)年、^{しょうむ}聖武天皇によって造営され、^{へいじょうきょう}平城京から都が遷されました。恭仁宮では「^{こんでんえいねんしぎいのほう}墾田永年私財法」(農地の私有を認める法令)が定められるなど、歴史上の重要な舞台となりました。都としての役目を終えた後の天平18(746)年には、恭仁宮の中心部が^{やましろこくぶんじ}山背国分寺(長岡京遷都以降は^{せんと}山城国分寺)へと造り替えられました。恭仁宮跡及び山城国分寺跡は史跡に指定されています。

昭和48年度から続く発掘調査は、令和元年度に100回目の節目を迎えました。長年にわたる発掘調査で、恭仁宮の実態解明は少しずつ進み、重要な成果が積み上がってきました。ここでは、令和元年度と令和2年度の第100・101次調査の成果から見えてきた朝堂院区画の様相を中心に話をしていきます。



第1図 古代の都の位置

2 これまでの調査成果

恭仁宮跡は、東西に約560m、南北に約750mの大きさで、周囲が高い土塀（築地塀）で囲まれていました（第2図）。平城宮と比べると約3分の1の大きさになります。

宮の中心にあり、最も重要な施設が大極殿です。大極殿は、高さ1m以上の大きな土壇の上に造られた、東西45m、南北20mもある大きな建物でした。北西と南西の隅に置かれていた礎石は、今も当時のままの位置に残っています。

大極殿が建つ大極殿院は周囲を回廊で囲まれていました。回廊は、築地を中心として両側を通路にした「築地回廊」と呼ばれる立派なものです（第3図）。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿や築地回廊が、平城宮と同じ規格で造られていることが判明しています。奈良時代の公式の歴史書である『続日本紀』には、平城宮から恭仁宮へ大極殿と築地回廊が移築されたことが記述されており、文献記録を発掘調査が裏付けることとなりました。

天皇が住み様々な儀式も行われた「内裏」は、通常一つしかないものですが、恭仁宮には東西に並ぶ二つの区画（内裏東地区・内裏西地区）があります。内裏西地区は、掘立柱塀で囲まれた、東西約98m、南北約128mの大きさで、中央に大型の掘立柱建物1棟が確認されています。内裏東地区は、北面が掘立柱塀、残る三方が築地塀で囲まれており、東西約109m、南北約139mの大きさで、内裏西地区より一回り広いことが分かります。また、内裏東地区では、中央に大型の掘立柱建物跡2棟が南北に並んだ状態で確認されました。内裏東地区と西地区は、聖武天皇と伯母である元正太上天皇の住まいとする説があります。

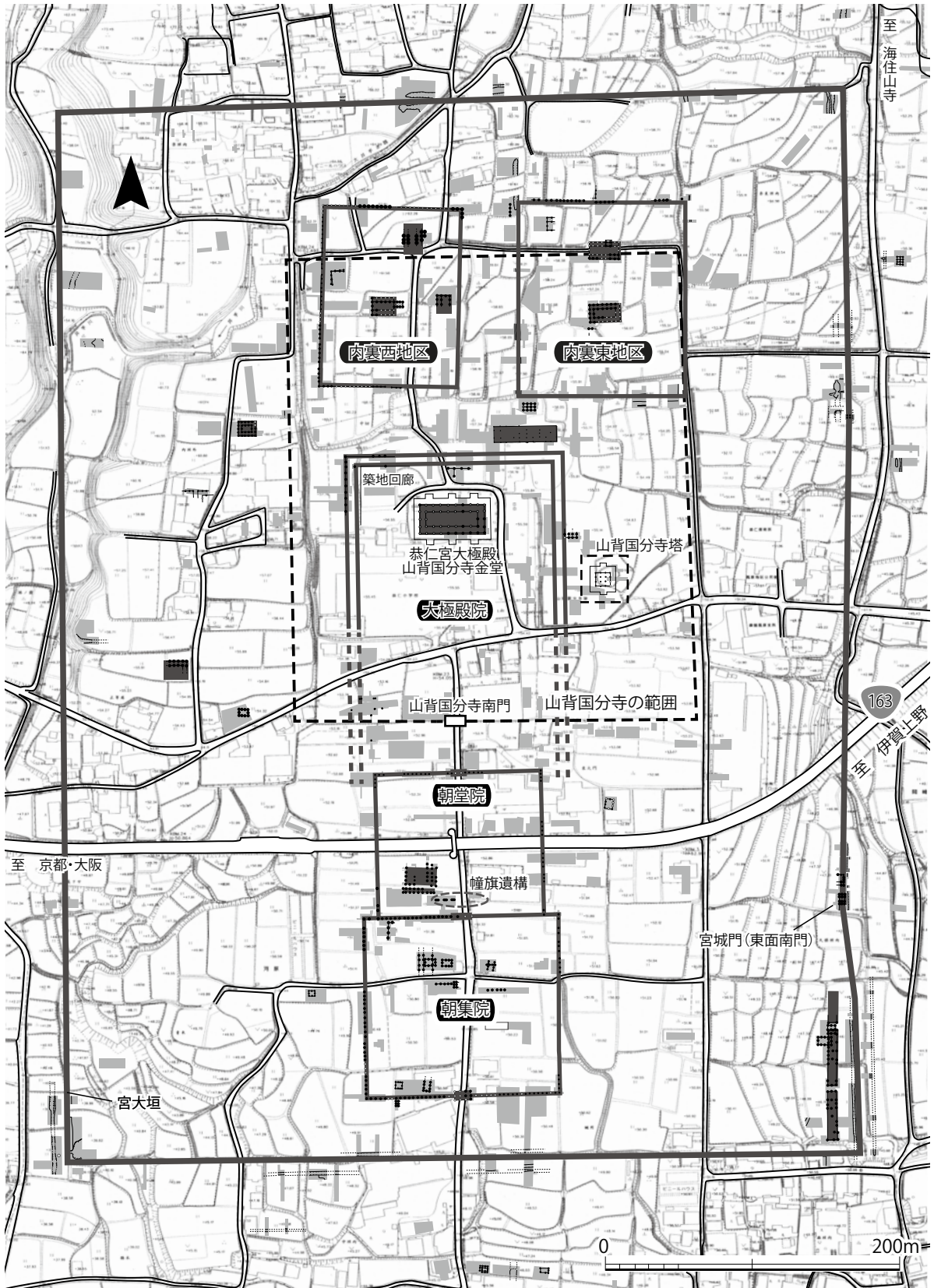
朝堂院は貴族や役人が儀式などのために出仕するところで、朝集院はその前に彼らが集まるところです。周囲は掘立柱塀で囲まれていました。朝堂院の南端では、朝堂院南門と大型の掘立柱建物が見つかっています。この大型掘立柱建物は、柱が密に立ち並ぶ総柱構造であることから、床張りであることがわかります。そして朝堂院地区南門の北側では、天平13(741)、14(742)年の元日朝賀の際に立てられた宝幢（幢旗）遺構が見つかっています。

3 第100・101次調査の成果

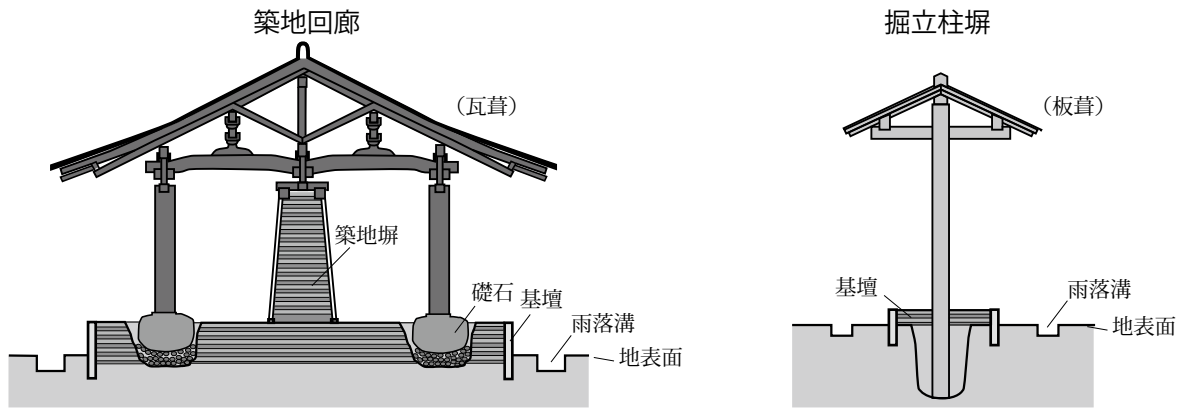
2か年の調査では、これまで未解明であった①朝堂院区画と大極殿院区画の接続方法の解明、②朝堂院区画の北西・南東隅の確定、③朝堂院区画北門の構造解明、④朝堂院地区内部の建物配置の4点の解明を目指しました。第100・101次調査には重複する点も多いことから、以下項目別に取り上げます。

①大極殿院区画と朝堂院区画の接続方法

大極殿院の規模は複数の案がありますが、いずれも確定できる証拠が不足しています（第



第2図 恭仁宮跡全体図(網かけは発掘調査済地点、1/4,000)



第3図 築地回廊・掘立柱塀の復元断面模式図

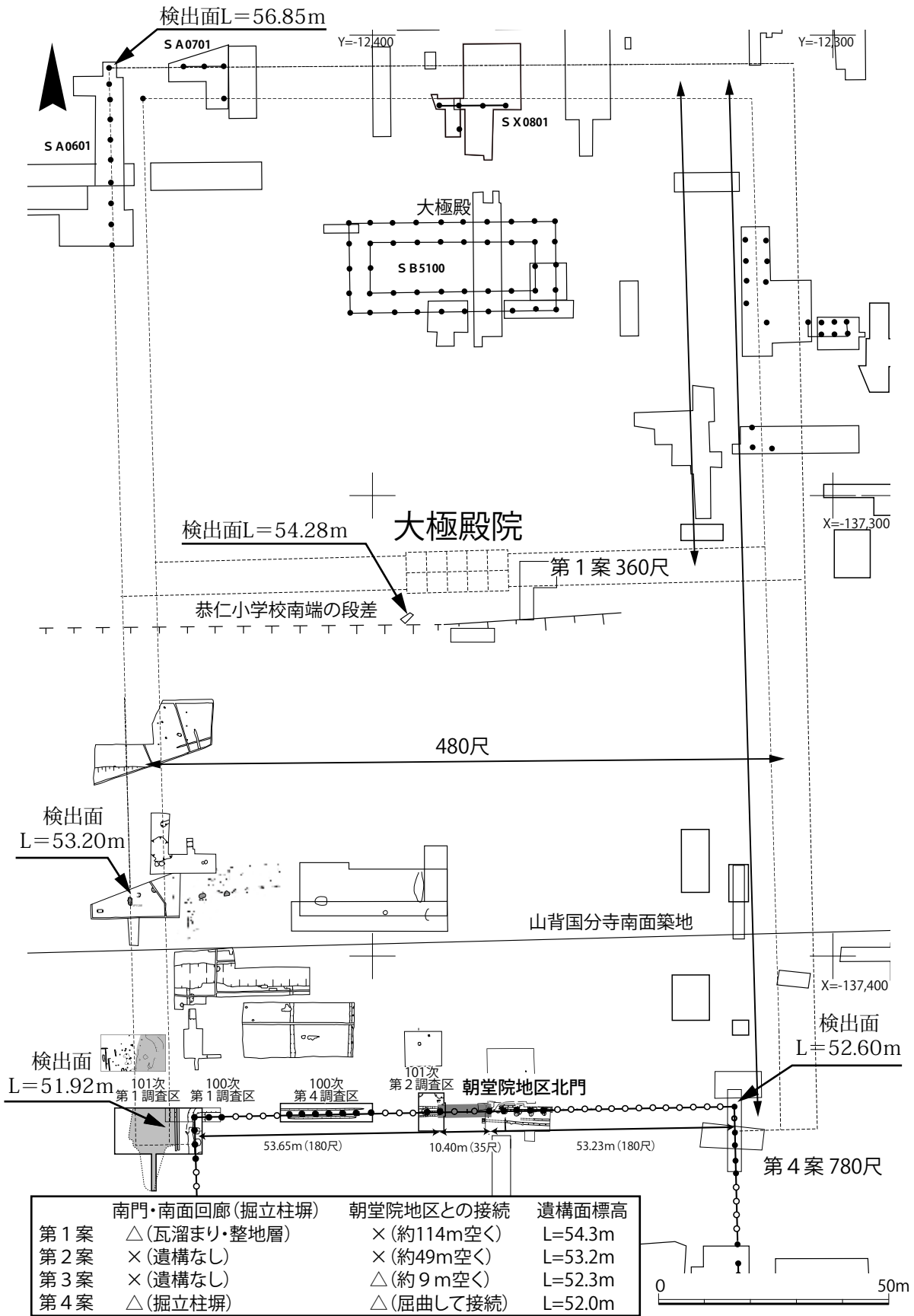
4図)。第100次調査第1調査区では、朝堂院区画の掘立柱塀を検出したものの、大極殿院回廊の明瞭な痕跡は確認できませんでした。ただし、回廊の整地の可能性のある強固な黒色整地土を検出したことから、第101次調査では調査区を大きく拡張し第1調査区としました(第6図)。

調査の結果、黒色整地土の範囲を確定することができました。黒色整地土は、大極殿院回廊の想定位置とほぼ一致し、東端には南北方向の溝19106があります。藤原宮朝堂院では、朝堂造営に伴う雨落^{あまおち}または水平基準のための素掘溝^{すぼりみぞ}を設けていることが判明していますの^(注1)で、溝19106も同様に建物造営に伴って掘削された溝の可能性もあります。また、今回の調査区の北側にあたる第98次調査でも、今回同様の固く締まる土層を検出しています。黒色整地土は、溝19106と同時に施行しており、重量物にも耐えうるほどの締まりの固さで、さらに朝堂院区画北西隅が近接する位置関係にもあります。状況証拠的に、黒色整地土が大極殿院回廊の基礎地業^{きそちぎょう}である可能性が高いといえそうです。

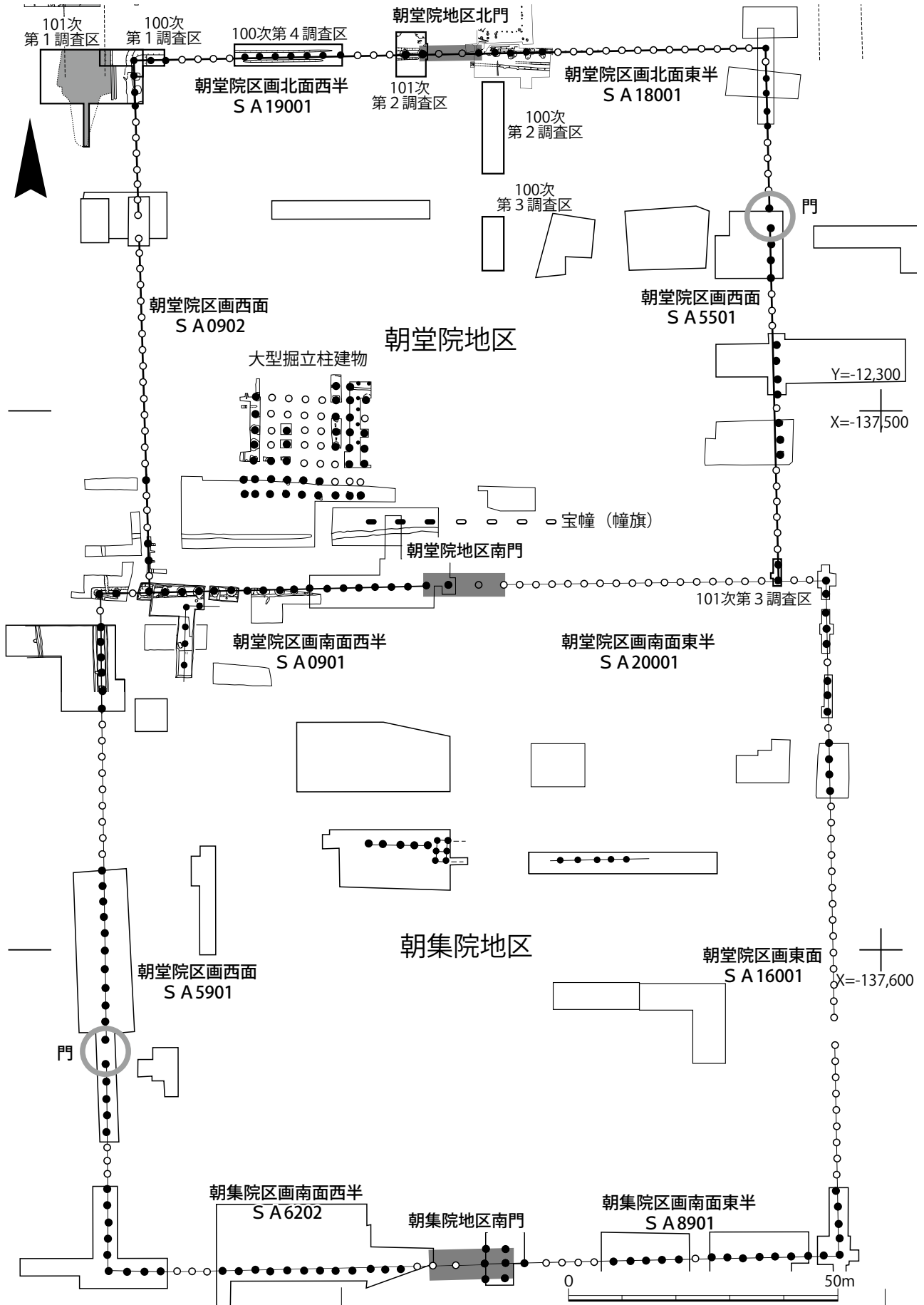
②朝堂院区画の北西・南東隅

北西隅の柱穴は、第100次調査第1調査区でほぼ想定位置で検出しました。柱穴は、谷地形を埋め立てた整地土上に設置しています。この整地土の状況を確認するために、第101次調査で整地土の断ち割りを実施したところ、整地土の中から多量の木片が出土しました。木片の中には後述する木簡^{もっかん}を含んでいることが特筆できます。谷地形を埋める整地土は、遺構検出面から約1.5m掘削しても自然地形に到達せず、恭仁宮造営時に大規模な整地を行っていることが判明しました。

南東隅の柱穴は、第101次調査第3調査区で検出しました(第7図)。検出した南東隅柱穴とすでに見つかっている北西隅柱穴とを結ぶと、第54次調査区の柱列は東にずれています。このずれの原因は不明です。



第4図 大極殿院全体図(1/1,250)



第5図 朝堂院・朝集院地区検出遺構(1/1,000)

③朝堂院区画北門

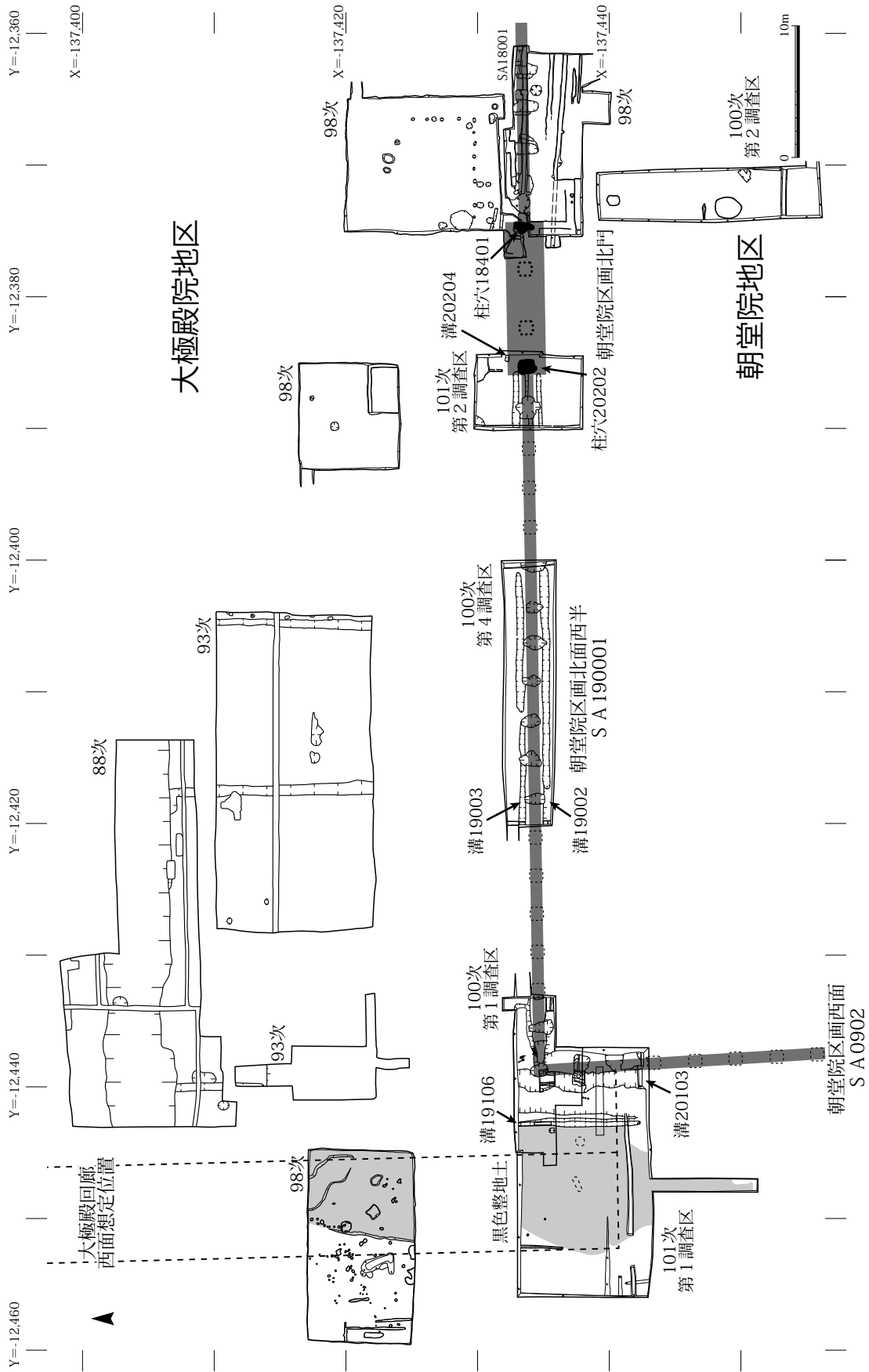
第100次調査第4調査区では、朝堂院区画北面掘立柱塀の南北に平行する溝19002・003を検出しました。この溝は、朝集院区画でも同様に検出されている溝で、掘立柱塀の基壇外装きだんがいそうの痕跡または雨落溝の可能性がります。溝19002・003は、第101次調査第2調査区の柱穴20202の西側で途切れます。柱穴20202の北側約1.5m（当時の寸法で約5尺、1尺は約0.296-297m）には、東西方向の溝20204があります。柱穴20202と恭仁宮中軸を挟んだ東側の第98次調査で検出した柱穴18401とは、約10.4m（約35尺）の距離があります。以上の遺構検出状況からみて、柱穴20202と柱穴18401は朝堂院区画の北門を構成している可能性が高いといえます。両柱穴間が35尺であることから、10-15-10尺間隔で柱が建ち、15尺の中央が扉となる三間門さんけんもんを想定できます。柱穴20202の北側にある溝20204は、門の基壇痕跡きだんまたは雨落溝といえます。本調査区の遺構面上からは、原位置をとどめないものせんの塀（瓦質のレンガ）が複数出土しています。これらの塀は、門の基壇の側面や上面に用いた可能性が高いものです。

④朝堂院地区内部の建物

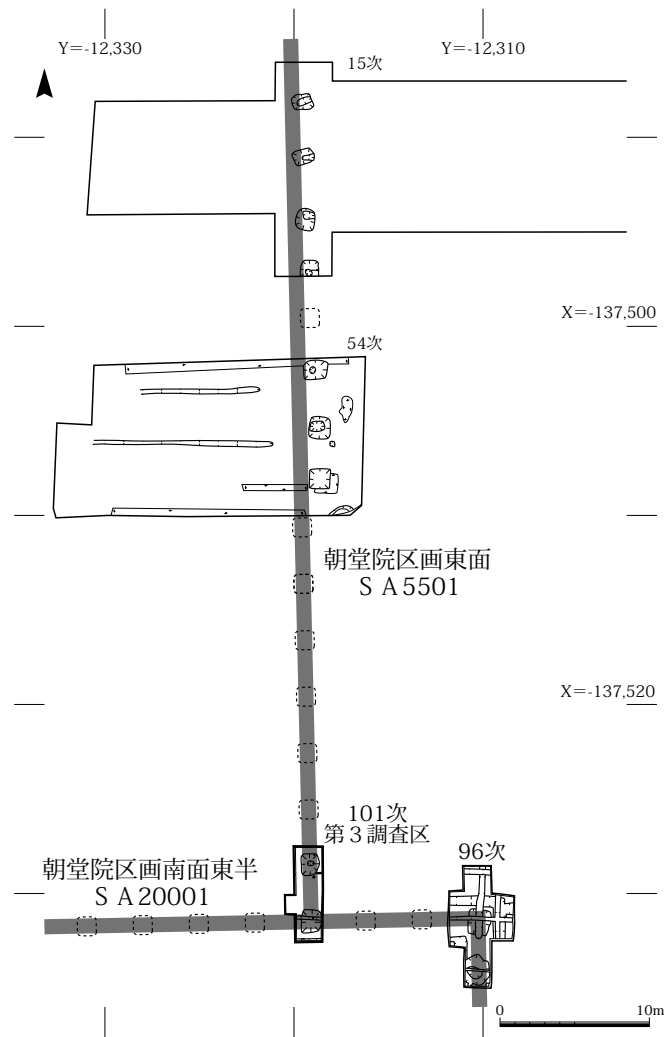
朝堂院地区内では、南よりで検出した大型掘立柱建物と付属する建物以外の建物が見つかりません。朝堂院の中央南端では平成26・27年度に天平14・15（741・742）年の元日朝賀に関わる宝幢（幡旗）遺構を検出していることから、『続日本紀』に記載のある「四阿殿」しあでん（あずまやのとの）（仮設の大極殿）が建つ可能性がありました（注2）。しかし、四阿殿の検出を目指した第100次調査第2・3調査区では、どちらからも遺構が検出できませんでした。遺構面上は、大型掘立柱建物の柱穴を覆っていた洪水由来の砂層に覆われていました。この洪水砂が確認できる部分では恭仁宮期の遺構が良好に残ることから、両調査地に四阿殿が建つ可能性はないといえます。ただし朝堂院地区の中央には国道163号線が通るため、四阿殿が国道の下に眠っている可能性は残されています。

4 朝堂院地区の様相

第100・101次調査の結果、朝堂院の四隅が確定し、北門の規模もほぼ明らかにすることができました。朝堂院区画の規模は、北・南面の平均値が約116.9 m（約395尺）、東・西面の平均値が約98.8 m（約333尺）となります。5尺刻みで考えるならば、東・西面は335尺で設計している可能性があります。朝堂院・朝集院区画の掘立柱塀は、約3 m（10尺）間隔で柱が立ち並びます。朝堂院区画の北・南面が395尺、東・西面が335尺の設計なら、それぞれ5尺の端数が残ります。北面は門の中央間が15尺となるため矛盾しません。東面では、北端から100尺南で15尺の間隔となる部分があります。同様に15尺の間隔は朝集院西面で



第6図 第100・101次調査区周辺遺構図(1/450)

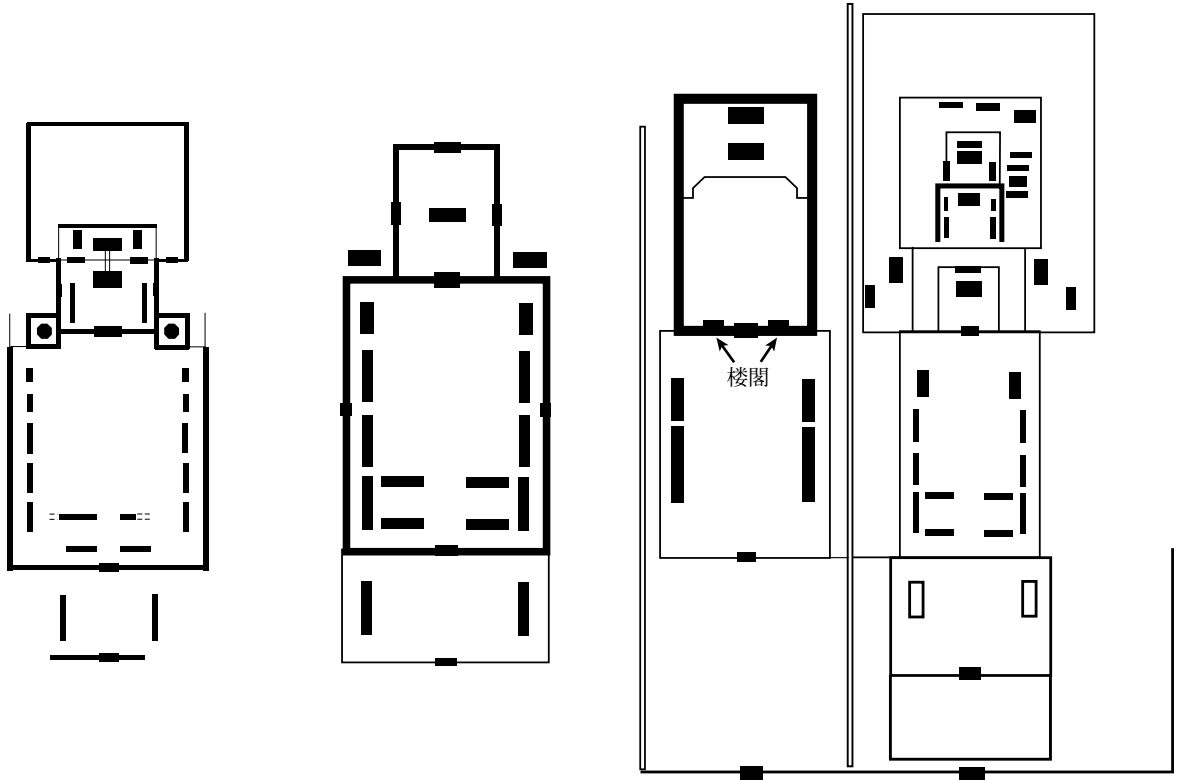


第7図 第101次第3調査区周辺遺構図(1/400)

も確認できます。これらの15尺の部分は門になると考えられています(第5図)。そのため、設計寸法に現れる5尺の端数は、門のために用意したものといえます。

第100次調査によって、朝堂院地区内の北半中央に建物がないことが判明しました。ただし、第100次第2・3調査区の東西には未調査域があり、未知の建物がある可能性はあります。また、前述のとおり、四阿殿は国道下に存在する可能性があります。

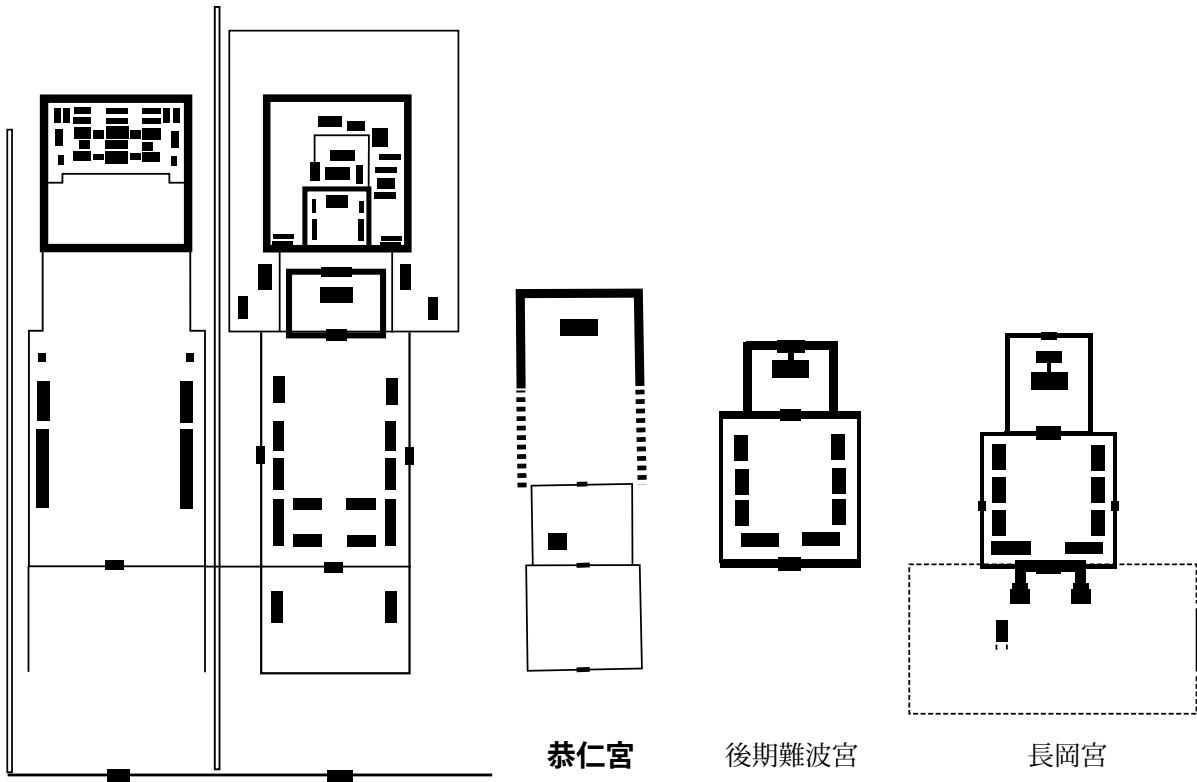
地区内の南西側で検出した大型掘立柱建物については、総柱であるため床張りの建物といえますが、朝堂としては類例のない構造です。他の都城で類似している建物としては、平城宮第一次大極殿院の南門両側に建つ^{ろうかく}楼閣があります(第8図)。第一次大極殿院の楼閣は、大極殿院回廊と一体化した掘立柱と礎石を併用する建物で、柱の直径が75cmと特大です。平面規模も構造も異なっていますが、^(注3) 恭仁京遷都直前の平城宮第一次大極殿院に建つ建物であり、恭仁宮にも同様の楼閣を建設した可能性は高いといえます。^(注3) 左右対称を基本とする古代の建物ですので、中軸を折り返した東側にも同様の建物があることでしょう。



前期難波宮

藤原宮

平城宮 (第一次)



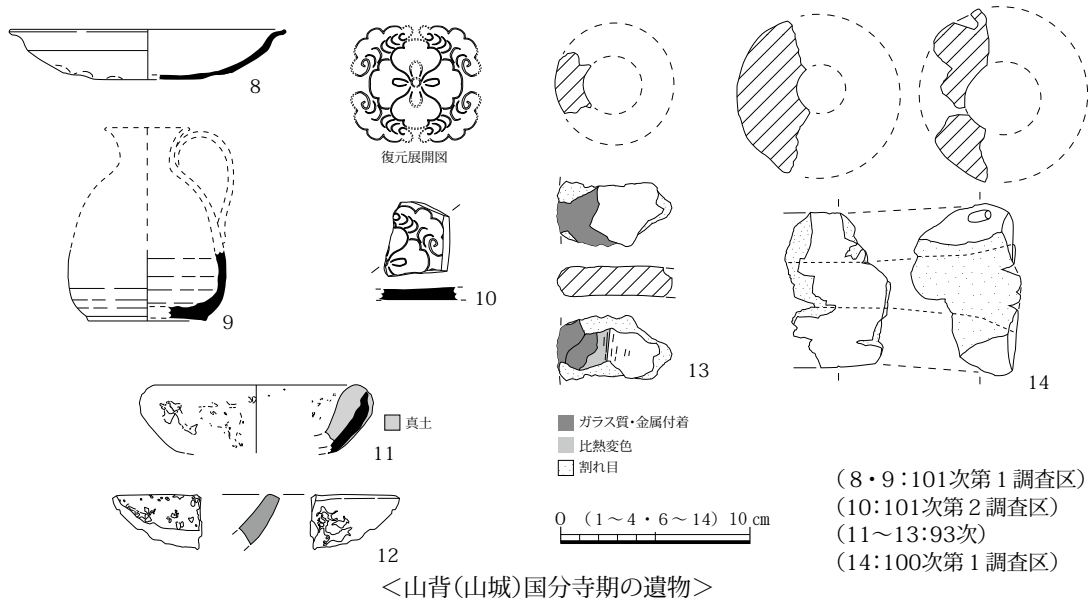
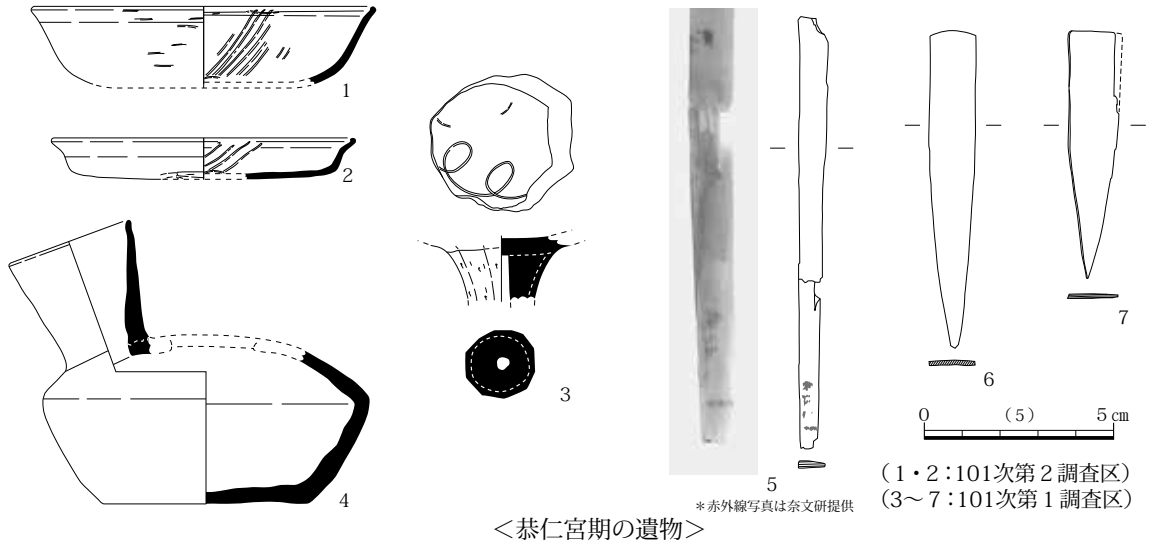
平城宮 (第二次)

恭仁宮

後期難波宮

長岡宮

第8図 古代の宮中樞部比較図(1/9,000)



第9図 出土遺物(5 : 1/2、5以外 : 1/4)

5 出土遺物

恭仁宮跡の中心部では、大極殿や国分寺塔、築地の周辺以外での遺物の出土量は多くない傾向にあります。そうした中で、第100・101次調査と隣接する第93次調査では比較的多くの遺物が出土しました。中でも特徴的な遺物を紹介します(第9図)。

恭仁宮期の遺物としては、1～7があります。出土遺物で多いのは、瓦類と土師器・須恵器です。1・2は土師器の杯で、内面に文様があります。3は土師器の高杯で、杯の底部に円形の文様があります。4は須恵器の平瓶です。

恭仁宮跡の立地は台地上にあるため、地中の水分が乏しく、木製品などの有機物は分解されて残らないのが通常です。しかし、第100・101次第1調査区では、谷地形を大規模に埋め立てた整地があり、谷地形中の水分が多かったために有機物が残されていました。5

～7はその中でも有機物のみが堆積した層から出土したものです。5は木簡で、墨痕^{ぼっこん}がありますが、欠損が多く残念ながら文字は読み取れません。赤外線写真は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の協力を得て撮影したものです。木簡は、『続日本紀』などの文献に記載のない文字資料として非常に重要です。本例は、恭仁宮全体で8点目、中心部では初の木簡であり、とても貴重なものです。6・7は木簡状の形状をしていますが文字のない斎串^{いぐし}(祭祀用具)です。

山背(山城)国分寺期の遺物は、寺院として活発な活動のあった平安時代の遺物となります。8は土師器皿で、9・10は東海の猿投窯^{さなげよう}の製品です。9は灰釉陶器^{かいゆうとうき}、10は緑釉陶器^{りよくゆうとうき}でいずれも当時の高級品でした。10は小片ですが優美な花の文様を刻んでいます。

11～14は金属器生産関係遺物です。11は土師器皿を用いた埴塙^{るつぼ}です。12は大型の青銅製品の破片ですが表面に熱が加わっています。13・14は鞆^{ふいご}の羽口^{はぐち}(送風管)です。第93・100・101次調査区は国分寺の門前にあたりますが、こうした立地で金属器の生産活動をしていたことは興味深い事例といえます。

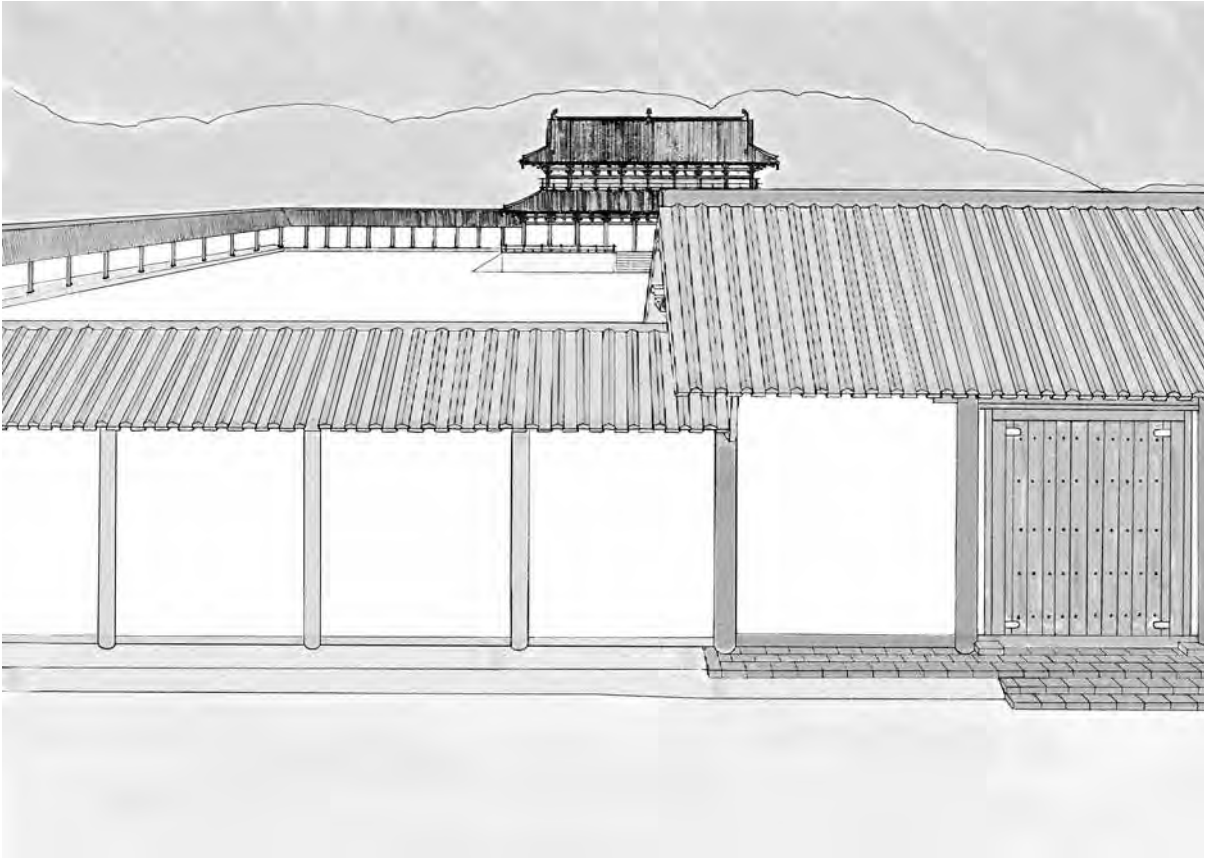
6 おわりに

恭仁宮跡の調査は、100回を超えてようやく中枢部の構造が解明されつつあります。朝堂院と朝集院の区画規模が確定したのは大きな成果といえます。また、恭仁宮の中心部で初の木簡が出土したことはとても重要です。大極殿院回廊の南限についても、その端緒となる成果を上げることができたといえます。ただし、当初目的とした大極殿院回廊の明確な遺構は検出できておりません。朝堂院地区内部の構造も不明な点が多く残ります。今後とも調査を継続しつつ、恭仁宮の構造解明を進めていきたいと思えます。

(注1) 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2003「朝堂院東第二堂・東面回廊の調査－第120次」
『奈良文化財研究所紀要 2003』

(注2) 古川匠 2020「恭仁宮の構造と造営順序」『条里制・古代都市研究』35号

(注3) 古川匠 2020「恭仁宮中枢部の儀礼空間とその構成－元日朝賀関連遺構の分析から－」『難波宮と古代都城』中尾芳治編



第10図 第101次調査第2調査区復元イメージ(南から)

長岡京遷都の実態

—周到に計画された遷都—

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課長 小池 寛

1 はじめに

延暦3(784)年11月11日「桓武天皇が平城宮から長岡宮に移幸する」という『続日本紀』^{しよくにほんぎ}の記事により長岡京遷都が歴史的事実として認定されています。一方、昭和29(1954)年に長岡宮第1次調査として実施された朝堂院会昌門^{ちやうどういんかいしやうもん}の発掘調査以降、現在までに宮域で535回、左京域で633回、右京域で1,240回、合計2,408回に及ぶ発掘調査が行われています。これらの調査によって、わずか10年の都である長岡京の完成度が、非常に高いことがわかりました。このことは、延暦4(785)年1月1日「長岡新京の大極殿で初めて元旦朝賀^{ちやうが}を行う」という『続日本紀』の記事からもうかがい知ることができます。

一方、発掘調査とともに『続日本紀』^{しよくにほんぎ}『日本後紀』^{にほんこうき}などの文献史料からの研究もさかんに行われ、奈良時代後期から平安時代前期を中心とする政治史研究のなかで難波宮・平城京・長岡京・平安京の遷都や廢都に関する見解が数多く発表されています。

今回は、長岡京遷都の政治的な背景を中心に発掘調査の成果を踏まえながら、長岡京遷都がいかに計画的に実行されたかについてお話したいと思います。

2 乙訓における大規模河川改修事業の実態

長岡宮が所在する向日丘陵の前面には、小畑川が北西方向から南東方向に流れています。この地域は、桂川の水運による利便性により大いに発展した一方で、小畑川の氾濫には苦しめられたようです。^(注1)

平成6(1994)年、長岡京跡左京第366次の調査(第1図)では、長岡京左京四条一坊の推定地^{ひがしいちぼうぼうかんひがしこうじ}で東一坊坊間東小路と四条条間小路の交差点を確認するとともに、交差点の南を流れる小畑川によって形成された池沼に排水をしていた状況も確認できました。^(注2)(第2図)。一方、長岡京の路面を造るための一部の整地層下で、護岸施設S X 36675を検出しました。この護岸施設は、真北から東に78度の主軸をもつ直線的な杭列とそこから南東方向に派生する最長5.5mを測る30列以上の杭列で構成されています。確認できた杭数は概ね500本で

あり、方形杭の一辺は15～25cm、長さは1～1.8mのツガ・マツ・クヌギ・モミ材であることが樹種同定でわかりました。この大規模な護岸施設は、小畑川の河道を固定するための杭出しの水制すいせいと考えられます(第3図)。昭和50(1975)年、この調査地から北東方300mの地点で実施された左京三条二坊の調査でも杭を打ち込んだ遺構が確認されており、少なくとも1km以上にわたって護岸施設が造営され、以北に所在する条坊や諸施設を氾濫から守っていたと考えられます(第6図)。

さて、これらの施設が造られた時期ですが、護岸施設S X36675と隣接して見つかった自然流路S X36604間の僅かな平坦面から墨書人面土器が出土し、護岸施設S X36675の東端の杭の密集部から須恵器壺と人形が出土しました(第4・5図)。須恵器壺の型式から平城宮土器V期(768～784年)に比定でき、この長岡京遷都前の大規模改修事業が、記事と深く関係していたと考えられます(第6図)。

3 長岡京遷都の背景

では、なぜ長岡京に遷都する必要があったのでしょうか。一般的に桓武天皇は天武系から天智系に王系が移行したため、旧来の平城京の豪族や仏教勢力の排除を目的に遷都したとされています。(注4)光仁・桓武天皇にはこのような政治的思惑があったことは事実だと考えられます。遷都の背景について見ていきたいと思います。

(1) 念願だった天智系天皇の即位

話は少しさかのぼります。大化元(645)年、大化改新の中心人物であった天智天皇てんじ(中大兄皇子なかのおおえのみこ)が亡くなった翌年の天武元(672)年6月、天智天皇の皇弟である大海人皇子おおあまのみこが、天智天皇の太子である大友皇子おおとものみこに対して兵を挙げ、「壬申の乱」が勃発します。その結果、反乱を企てた大海人皇子が勝利し、天武天皇として即位します。その後の約100年は、主に天武系の天皇が皇位につくこととなります(第7図)。

宝亀元(770)年、後継天皇に関しての称徳天皇しょうとくの遺言を根拠として、称徳天皇七七忌明けの10月1日に光仁天皇こうにんが即位します。天智系の光仁天皇が、天武系の称徳天皇の後継天皇として選ばれた背景には、光仁天皇が聖武天皇の娘井上内親王いのうえないしんのうを妻としていること、さらに井上内親王の皇太子である他戸親王おさべ(聖武天皇の王系)が存在したことがあり、一時的に天智系の天皇が即位しても、将来的に天武系の王系が維持されると時の政権中枢部に合意があったと考えられます。(注5)

しかし、宝亀3(772)年3月、皇后井上内親王は光仁天皇を呪詛じゅそしたとして廃され、また、5月には他戸親王が皇太子の地位を追われます。さらに両人は、光仁天皇の姉難波内親王なにわないしんのうを呪詛したとして幽閉ゆうへいされます。この政変により他戸親王に代わりに山部親王やまべしんのうが立太子

し、天智系の桓武天皇として即位します。^(注6)

一連の政変から光仁天皇を中心とする政権が、天智系の桓武天皇^{かんむ}即位をいかに計画的に進めたかがおわかりいただけたと思います。

(2) 難波宮廃都

天武系都城である難波宮を解体し、長岡京に遷都した背景には戦略的に長岡京遷都を既成事実化する目的があった一方で、平城京の解体を待っているのは、光仁・桓武天皇が構想する天智系新都である長岡京の完成が危うかったため、難波宮の資材を徹底的にリサイクルし、短期間で長岡京遷都を完工するねらいがあったと考えられます。^(注7) 難波宮の重圈文軒瓦^{じゅうけんもん}が、長岡京で出土することが、それを示しています。

(3) 平城京がもつ地理的弱点の克服

藤原京や平城京が所在する奈良盆地は、風水害も比較的少なく、また、周囲を山で囲まれていたため自然の要塞が備わった地理的条件下にあります。しかし、東アジアとの交易・交流を円滑に進めるうえで、総延長68kmの大和川を往来しないと大阪湾沿岸地域と行き来できない地理的弱点は改善できません。そこで東アジアとの窓口や物流拠点として、大阪湾に近い難波宮が副都として機能したと考えられます(第8図)。

一方、長岡京と平安京が所在する京都盆地は、木津川・宇治川・桂川の合流点に近く、淀川を介して瀬戸内海ひいては東アジアに直結する水運の利便性があります。また、長岡京遷都にあっては、難波宮の資材を淀川によって運搬し、山崎津を整備したうえで陸揚げしました。

当時の難波津は、すでに大型船が停泊することができないほど土砂の流入があり、難波津を通じて瀬戸内海地域、ひいては東アジア地域との結びつきを強固にする機能は、すでに失われていたことも京都盆地を選んだ背景にあったと考えられています。長岡京遷都にあたり資材の大半は難波宮から移築されました。その際、機能を失った難波津から三国川^(注8・9)(神崎川)の河口を中核港にするために淀川本流への分岐工事を行ったと考えられます。

(4) 長岡京遷都の財政基盤

桓武天皇が、乙訓を選地した理由については、桓武天皇の母高野新笠^{たかののにいがさ}の実家が乙訓郡大枝にあり、桓武天皇も幼少期を過ごしたことがあげられます。また、遷都をするうえで活躍した藤原朝臣種継^{ふじわらのあそんたねつぐ}の祖父秦朝元^{はたのあさもと}が、山背国葛野郡^{かどの}に本拠をもつ秦氏と関係が深かったことも忘れてはなりません。^(注10)

長岡京造営は多数の労働力と資材を要する大事業であることから、京都盆地にその基盤をもち、在地有力者で渡来系氏族である秦氏の経済基盤が重要視されたと考えられています。^(注11) しかし、秦氏の記事を『続日本紀』『日本後記』で調べると、大同3(808)年の

はたのつきまろ げじゅごいじょう
 秦都岐麻呂が外従五位上になる記述が初出であり、ほかにはあまり見られないことから、秦氏の経済基盤を過大評価すべきでないとする意見も見られます。^(注12)長岡京遷都の財政基盤については、さらなる研究を待たねばなりません。

このように長岡京遷都は、光仁天皇から桓武天皇へと引き継がれた政治的思惑を基に計画的に実行された国家事業だったのです。

4 『続日本紀』『日本後記』に見る長岡京遷都

(1) 山背国乙訓郡に関する記事

延暦3(784)年5月16日に長岡京遷都のために藤原朝臣種継や佐伯朝臣今毛人らが山背^{やましる}国に派遣される以前から長岡京遷都が計画的に進められたことを、あらためて『続日本紀』『日本後記』で確認しておきます。

山背国乙訓郡^{おとくにぐん}という地名が『続日本紀』に記されるのは、光仁天皇宝亀2(771)年閏3月、無位の乙訓王^{おとくにおう}を従五位下^{じゅごいげ}に復する記事が初めてです。また、宝亀5(774)年1月、山背国乙訓郡乙訓社(長岡京市角宮神社)^{すみのみや}に狼や鹿が多く集まり、野狐百頭が7日間にわたって吠えたこと、そして、同6月、乙訓社に幣帛^{へいはく}を奉納した記事などがあります。さらに、宝亀7(776)年8月、山背国乙訓郡、外従五位下の羽栗翼^{はぐりのつばさ}に臣の姓^{おみ}を授けた記事も確認できます。その前には乙訓郡に関する記事がみられないことから、宝亀2(771)年から宝亀7(776)年の間に政権内部にとって山背国乙訓郡がもつ政治的な重要度が急速に高まったと考えられます。

(2) 藤原朝臣種継の官歴

長岡京遷都に重要な役割を果たした藤原朝臣種継の官歴について見ておきます(第9図)。従六位上^{じゅろくいじょう}の任官以降、天平神護2(766)年従五位下、宝亀6(775)年には近衛少将^{このえのしょうしょう}・山背守^{やましるのかみ}、暗殺された延暦4(785)年には贈正一位^{しょういちい}、左大臣の任官を受けています。特に、宝亀5(774)年以降の急速な昇進は、藤原朝臣種継の祖父が秦朝元であり、山背国葛野郡に本拠をもつ秦氏との関係があったことと長岡京遷都の構想を積極的に進める光仁・桓武天皇の思惑が背景にあったと考えられます。

(3) 祥瑞・自然災害・飢饉や疫病、そして、奉納や祭祀、大祓

『続日本紀』をみると、宝亀元(770)年から同6(775)年にかけて、政権の安定に影響がある祥瑞^{しょうずい}(吉兆)や政権を脅かす地震・旱魃^{かんぼつ}・洪水・飢饉・疫病、そして、厄^{やく}を祓^{はら}うための神社への奉納や祭祀、大祓^{おおはらえ}の記事が増加します。特に、宝亀5(774)年から宝亀6(775)は、祥瑞は4回、気象災害の記事が7回、それらに伴う飢饉や疫病は12回、奉納や祭祀、大祓については12回みられます(表1)。以上のように光仁・桓武天皇の新京造営の背景には、

自然災害も大きな要因としてあったと考えられます。

5 まとめ

宝亀3(772)年3月、光仁天皇を呪詛したとして皇后井上内親王、他戸親王がその地位を追われ、さらに両人は、光仁天皇の姉難波内親王を呪詛したとして幽閉されます。この一連の政変は、光仁天皇が天智系の桓武天皇即位を計画的に進め、また、長岡京遷都が、光仁・桓武天皇の政治的思惑を基に計画的に実行された国家事業であったことを示しています。

長岡京造営は、延暦3(784)年から始まったと思われがちですが、旧小畑川の氾濫を防ぎ、河道を固定するために設けられた護岸施設S X36675の施工が平城宮土器V期(768～784年)に比定できることから、それよりさかのぼる宝亀6(775)年10月6日、畿内五国に使者を遣わせて、池や溝の修理や造営を命じた記述との深い関係性を指摘しました。^(注13) 河道を固定するための護岸施設S X36675こそが、周到に計画された長岡京遷都の実態をよく表しています。^(注14)

(注1) 日下雅義 1992「古代都京の立地条件」『長岡京古文化論叢2』

(注2) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997「長岡京跡左京第366次・中福知遺跡」『京都府遺跡調査概報』78

(注3) 京都府教育委員会 1975「長岡京跡左京三条二坊第2次」『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』

(注4) 井上満郎・中山修一 1983「第5章 長岡京のなりたち」『向日市史』向日市

(注5) 渡辺晃宏 2001『平城京と木簡の世紀』講談社

(注6) 山中 章 2001『長岡京研究序説』塙書房

(注7) 山中 章 1996「第二節 長岡京と古代都城」『長岡京史』長岡京市

(注8) 北村優季 2007「長岡平安遷都の史的背景」『国立歴史民俗学博物館研究報告』134

(注9) 直木孝次郎・中尾芳治 2003『シンポジウム古代の難波と難波宮』学生社

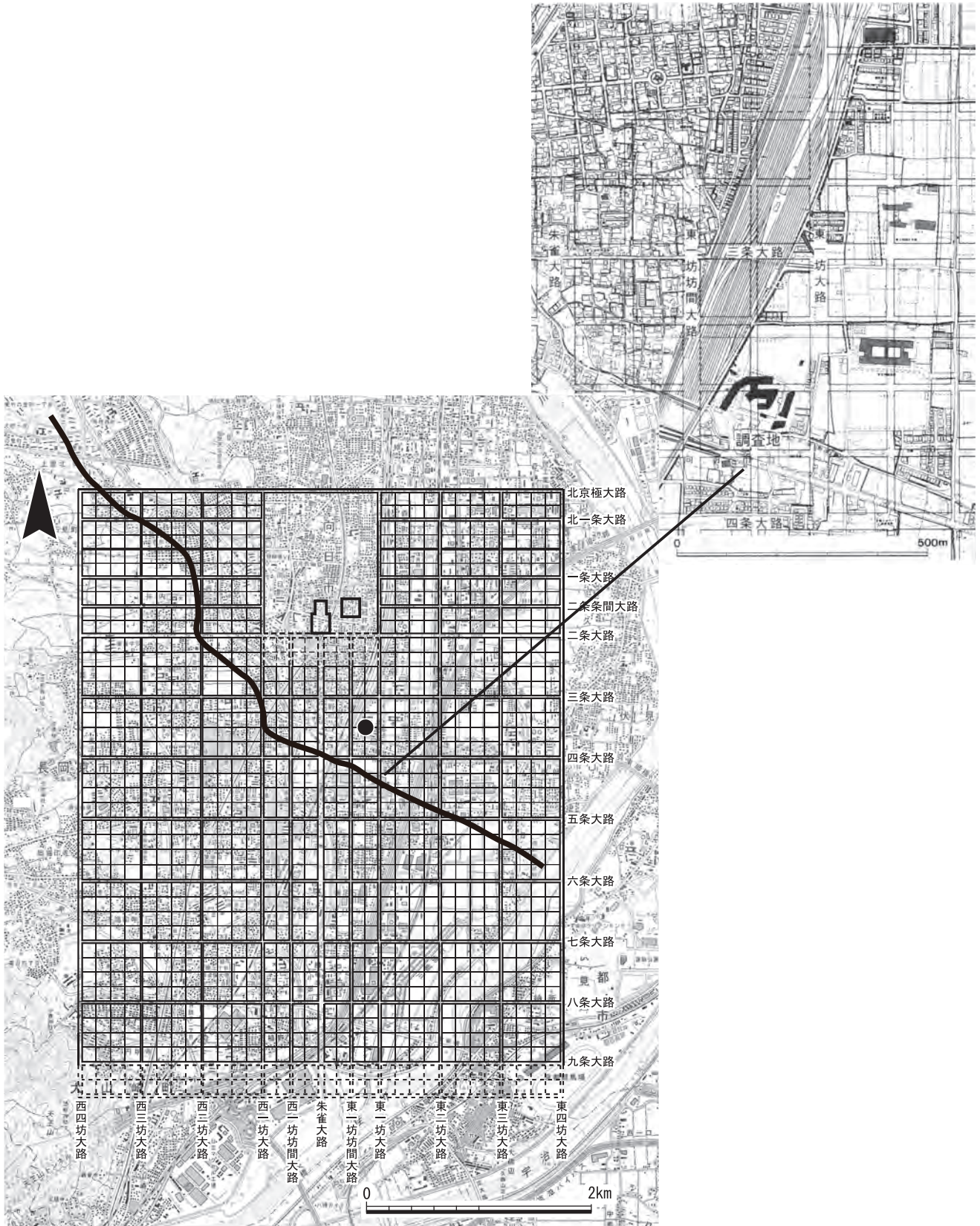
(注10) 井上満郎 2013『桓武天皇と平安京』吉川弘文館

(注11) 中村修也 2001『平安京の暮らしと行政』山川出版社

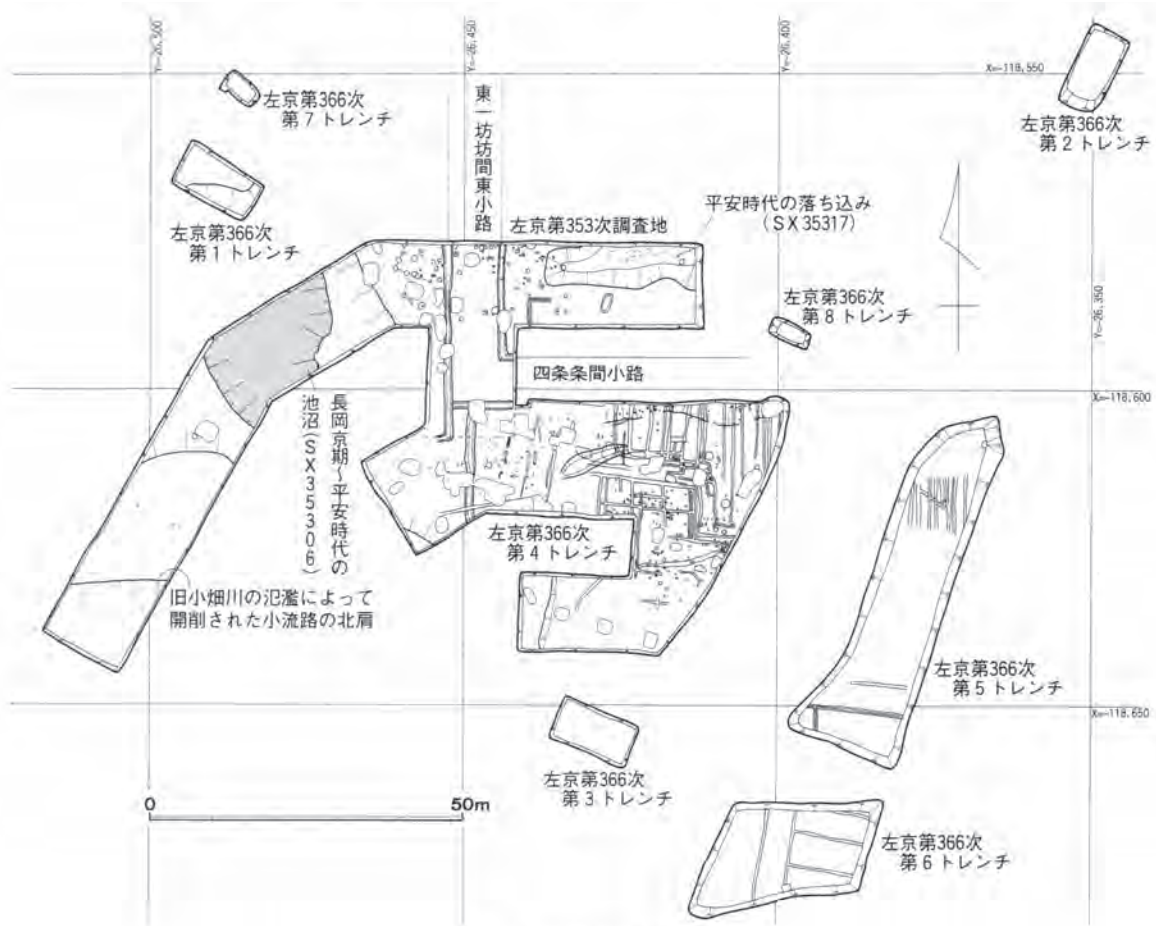
(注12) 小林 清 1975『長岡京の新研究』比叡書房

(注13) 小池 寛 1998「長岡京造営に伴う河川改修事業」『京都府埋蔵文化財情報』67 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

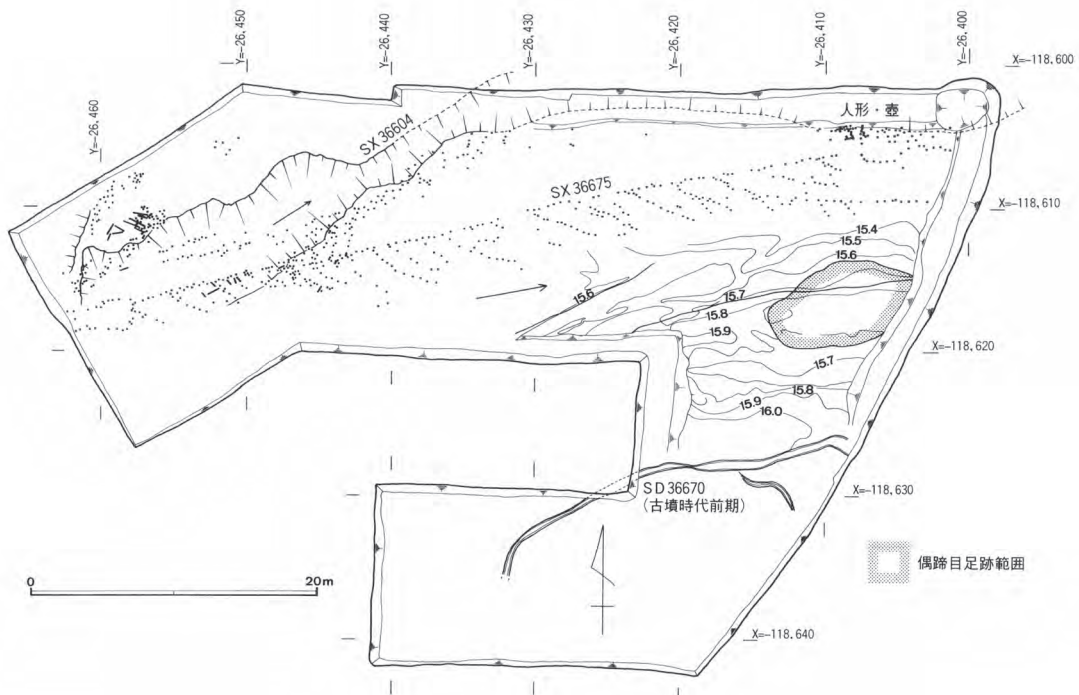
(注14) 小池 寛 2020「長岡京遷都の実態」『難波宮と古代都城』同成社



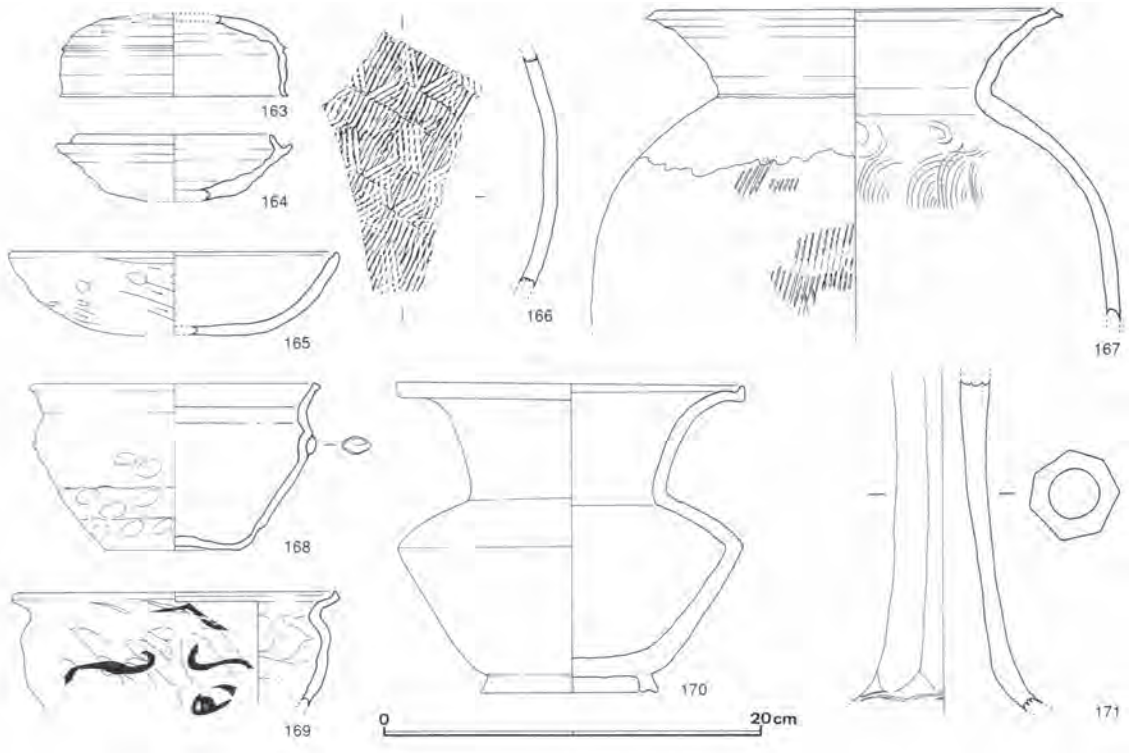
第1図 調査地位置図



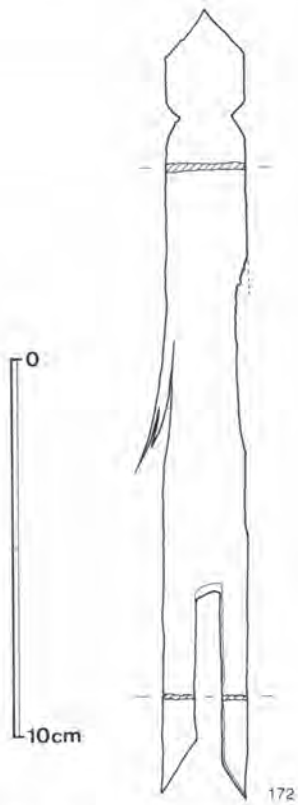
第2図 トレンチ配置図



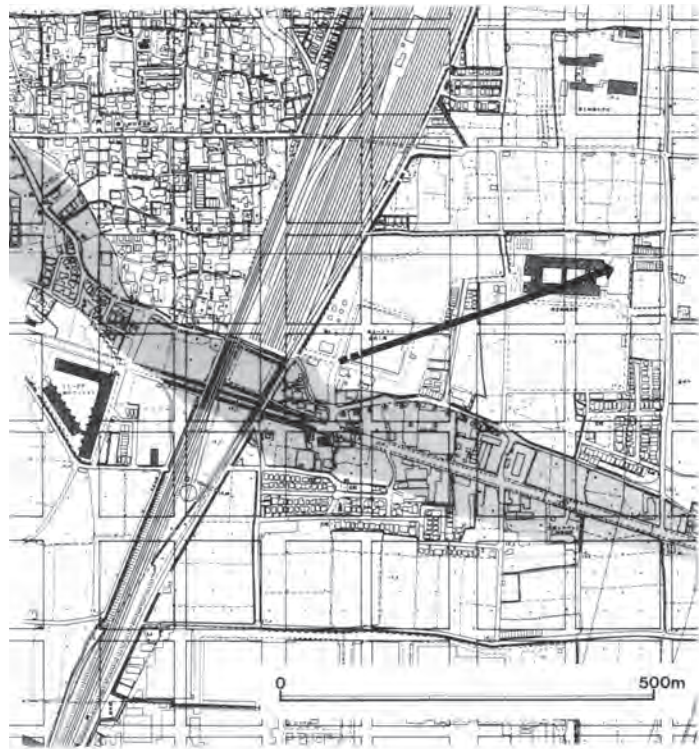
第3図 第4トレンチ杭列実測図



第4図 出土遺物実測図(168~170：護岸施設 S X 36675)



第5図 人形実測図
(護岸施設 S X 36675)



第6図 旧小畑川河道と杭列位置関係図(矢印が杭列)



写真1 東一坊坊間東小路と四条条間小路の交差点



写真2 護岸施設SX36675杭列検出状況(北東から)



写真3 護岸施設SX36675杭列検出状況(南西から)



写真4 護岸施設SX36675杭列検出状況

表1 長岡京遷都関連年表

西暦	年号	天皇	月	事 項		
770	宝亀元	称徳	8	天皇が西宮正殿で崩御される（53歳）。		
			8	山部親王（後の桓武天皇）に従四位下を授ける。		
			9	京と諸国で大祓をする。		
771	宝亀2	光仁	10	白壁王が大極殿で即位し、元号を宝亀と改めた。		
			3	諸国に疫病の神を祀らせる。		
			閏3	無位の乙訓王を従五位下に復した。		
			772	宝亀3	2	皇后井上内親王が呪詛の罪に連座し、地位を廃される。
					4	造薬師寺別当の道鏡が死去する。
			773	宝亀4	1	山部親王（後の桓武天皇）を皇太子とする。
			774	宝亀5	1	乙訓郡の乙訓社に狼や鹿が多く、野狐百頭が吠えるが、7日で治まる。
					6	乙訓郡の乙訓社に幣帛を奉る。
			775	宝亀6	10	地震。風雨と地震のため大祓を行う。畿内五カ国の池や溝を修理・造営させる。
			776	宝亀7	8	山背国乙訓郡の外重五位下の羽栗翼に臣の姓を賜う。大風。全国に蝗の害発生。
12	山背国葛野郡の秦忌寸箕造ら97人に朝原忌寸の氏姓を賜う。					
777	宝亀8	3	宮中でしきりに奇怪な事が起こり、大祓を行う。			
778	宝亀9	1	高野朝臣（桓武天皇生母の新笠）に従三位			
781	天応元	光仁	4	3日、皇太子は光仁天皇から位を譲られ皇位に就く。4日、早良親王を皇太子とした。		
			4	天皇の母親の高野夫人（高野朝臣に新笠）を皇太夫人と称す。		
			4	賀茂神を祭る賀茂御祖神社と賀茂別雷神社の禰宜や祝などに初めて笏を持たせた。		
			12	地震2回。23日、光仁太上天皇が73歳で崩御、桓武天皇、喉破れるほど、悲しみ泣き叫ぶ。		
782	延暦元	4	山背国が京職の兵と同様、調の免除を願い出る。			
783	延暦2	光仁	2	正三位藤原朝臣乙牟漏・従三位藤原朝臣吉子を桓武天皇夫人とする。		
			4	正三位藤原夫人（乙牟漏）を皇后とする。		
784	延暦3	桓武	5	午前6時、四分の黒斑の蝦蟇二万匹が難波市南道から三町南行し、四天王寺に至る。午前12時消散。		
			5	16日、乙訓郡長岡村に遷都するため、従三位の藤原朝臣種継や従三位佐伯朝臣今毛人らを山背国に遣わす。		
			6	10日、従三位の藤原朝臣種継や従三位佐伯朝臣今毛人らと六位官人八名を造長岡使に任じる。宮殿造営開始。		
			6	13日、遷都報告の為参議近衛中将らを賀茂大神に遣わす。調・庸や宮造営物資を諸国に命じ長岡宮に進上。		
6	23日、新京（長岡京）の宅造営のため、諸国の正税68万束を右大臣以下参議以上の官人等に賜う。					

784	延暦3	桓武	6	28日、宮内での人民の私宅が57町あり。山背国の正税4万3千束余を持主に賜う。
			7	4日、阿波・讃岐・伊予国に命じ、山崎橋の料材を進上させる。
			11	長岡遷都のため、賀茂上下二社に従二位、松尾・乙訓二神に従五位下を叙す。
			11	24日、中宮と皇后、長岡に到着。28日、賀茂上下二社、松尾・乙訓二神を修理。
785	延暦4		5	山背国が皇都なり、長岡村から他所に遷った人民の戸籍は京として扱うように命じる。
			7	長岡宮造営に使役する人夫に労賃の支給命じる。諸国人民31万4千人を雇用。
			8	長岡宮太政官院の垣を築いた従七位上の大秦公忌寸宅守に従五位下を授ける。平城宮に行幸する。
			8	28日、中納言・従三位の大伴宿禰家持が死す。死後二十日余日に大伴継人・大伴竹良が藤原朝臣種継を殺害。
			9	藤原朝臣種継が薨じる。皇太子早良親王を廃す。
786	延暦5		1	従三位藤原朝臣旅子を夫人に任じる。地震。
787	延暦6		2	岡成（桓武天皇の皇子）に長岡朝臣の氏姓を与える。
788	延暦7		10	本年は豊作。水陸交通の便を考えて長岡村に遷都した。天皇が長岡宮に帰還した。
789	延暦8	9	水陸便利な長岡の地に遷都するが、皇居未完成。建設作業従事者は疲弊。減税する。	
		3	造東大寺司を廃止。	
		8	長岡宮造営官人に位階。	
791	延暦10	12	中宮（桓武天皇母、高野新笠）が崩じる。	
		4	山背国管内の諸寺塔の修理指示。	
792	延暦11	9	平城宮の諸門を解体し、長岡宮に移築させた。殺牛の漢神祭を禁止。	
793	延暦12	6	畿内の名神に幣帛を奉る。皇太子健康祈願。皇太子の病が崇道天皇（早良親王）の祟りと判明。	
		1	大雪が降る。14日以降七日間の殺生禁断を指示する。遷都のため、山背国葛野郡宇太村に視察させる。	
		3	天皇が葛野に行幸し、新京（平安京）を巡覧する。伊勢大神宮に奉幣し、遷都を奉告する。新京宮城工事。	
794	延暦13	11	天皇が新京を巡覧する。交野で狩猟。	
		7	長岡京の東西の市を新京に遷す。宮中と京・畿内において地震。	
		9	一日、二日地震。三日間殺生禁止。天皇交野で狩猟。諸国の名神に奉幣。新京への遷都と蝦夷征伐祈願。	
		10	天皇が交野で狩猟。22日天皇が新京に遷る。造宮使と山背国が奏献して五位以上に農具や衣被を下賜。	
		10	28日遷都。	
11	天皇が北岡（平安京北峰丘陵）で狩猟。山背国の地勢を褒め、山城国と改名。平安京と呼称。			



公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。



<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189